



aoi - 扉

橋本コウ

プロローグ

時が止まったかのような超スローモーションで、街中を歩く人々の顔がケイの視界に流れ込んできた。たくさんの知らない顔があった。おそらくひとりひとり見ても、知っている顔はないだろう。東京の人ごみの中ですれ違うたくさんの人の中に、これまで会ったことのある人、もしくはこれから会うことになろうとしている人が、いったいどれほどいるのだろうか。文字どおり十人十色の顔だ。突然、ケイはそのゆったりと流れる時間の中に既視感を覚えた。誰かがケイを見つめているような気がした。ケイはその誰かを探そうとしたが、電撃的に襲ってきた強烈な眩暈にスクランブル交差点の真ん中でしゃがみこんだ。超スローモーションの世界は完全に止まった世界になった。多色に染められた世界がモノトーンに変わっていく。そして時間が巻き戻されていく。虚ろになる意識の中で、アナログ時計の針が逆回転しているのが見えた。ケイの中で風化してしまった風化してはいけなかった懐かしさの罪が彼を襲った。鬱蒼とした森のにおいが立ち込めてきた。

迷い子

昨日までは美しかった景色が、今日は不安と恐怖をあおるモンスターに生まれ変わっていた。きれいな黄緑色の木々は、重々しい深緑と化した。肌をなでるような川のせせらぎは、孤独の世界を感じさせるだけの効果音にしか聞こえなくなった。ケイはひとり、川沿いの道を行くあてもなく歩き続けていた。自分がどこを歩いているかなんて、わかるわけもなかった。歩き疲れて足どりは重く、孤独の恐怖で震える身体は、わずか6歳のケイの体力を極限まで奪っていた。

テント内に洩れる朝日のまぶしさにケイが目覚めたとき、いっしょにキャンプに来ていた父親の姿が見えなかった。「パパ？」と声をかけたが父親からの反応はなかった。朝食の支度で洗い場に行ったか、トイレにでも行ったのだろう。ケイはバーベキューで使った鉄板の横に設置された簡易チェアに座り、オレンジジュースを飲んで父親の帰りを待っていた。しかし30分くらいたっても父親は戻ってこなかった。たとえ散歩だったとしても、ケイを置いていくことはおかしいし、時間的に考えても長すぎる。とうに飲み干していたグラスの底にたまったオレンジ色の膜を、ケイはぼんやりと見ていた。

異変を感じたのは、父親を見た人がいないか探そうと思って、ケイたちよりも下方にテントが張られているエリアに足を運んだときだった。父親とキャンプ場に来たときにはたしかに他の人々もいたし、昨夜も夜遅くまで騒いでいた人たちがいた。しかしいま、すっかりキャンプ場に人の気配はなくなっていた。ケイたちと同じようにバーベキューをやったであろう跡や、花火の後の火薬の残り香が漂っているにも関わらず、人の姿はなかった。ケイの360度の視界には、山と森だけが静かに構えていた。

ひとりでいることの恐怖から逃れようと、ケイはキャンプ場には残らずに山道を歩きはじめた。キャンプ場を訪れていた人たちがいなくなっている異常さに子供ながらに気づいてはいたが、父親を探すために山登りをはじめた。道を把握しているわけでもなく、登山に必要な装備をしているわけでもない。まして山での衣食住を自分で管理できるわけもなかった。ケイの父親探しは、歩きはじめてわずか3時間で無計画さを露見し、彼の幼い体力を奪いとった。からからになった喉を潤そう。道沿いで静かに流れている川の水際にある座りやすそうな大きめの石に向かいかけたケイだが、足元のでこぼこしている石の道をバランスよく進むことができず、つまづいて転んだ。転んだというよりも、体力がなくなり気を失ったかのような意志の感じられない動きだった。ケイは薄れゆく意識の中で、川の反対側に立っている影を見た気がした。

「パパ・・・」

身体の下に敷かれた大小の石の痛みも感じずに、ケイは意識を失った。

柔らかい温かさに包まれていた。うっすらとまぶたを開けると、オレンジ色が揺らめく世界がケイの眼前に現れた。ゆらゆらとした炎の向こうには、ケイよりも少し年上の少女が木片を焚火につき足していたが、薄目を開けたケイに気づいたのか、安心した微笑みを送ってきた。少女は持っている木片をすべて火の中に放り投げ、すばやい動きでケイの横に座った。

「目が覚めて良かったー、びっくりしたよ、散歩してたらあなたが歩いてて、いきなり倒れるんだもん。頭とか打たなかった？」

少女は瞬きもせず、まん丸の目をケイに向けて一息にしゃべった。早口のわりには一言一言がはきはきとしていて、流れるような音とリズムが印象的だ。ケイは寝起きで少女の言葉を理解できなかったのか「は？」と目が点になった。まん丸と点が対照的なふたりの瞳の中に、炎が投影されている。その不思議な色をした瞳に吸い込まれるように、状況を把握できずに混乱しているケイから言葉が吐き出された。

「覚えてないけど、たぶん大丈夫。背中と足がちょっと痛いけど、頭は痛くないや」

少女のまん丸のだった目が、への字を書いたようなにっこりとした目になった。

「君は誰？ こんなところで何してるの？」

ケイの目はまだ点になっていたが、少女をまっすぐに見つめた。

「私はラン。この山でキャンプしてるの」

ランはそう言うと、焚火に手をかざした。九月とはいえ、山なので夜になると肌寒い季節だ。

「キャンプって、パパやママはいっしょじゃないの？」

気を失っていたケイには陽が沈んだのがいつだったかはわからないが、夜のとばりの重さや星が瞬く夜空の感じからして、夜も深まっているのは明らかだった。こんな遅い時間に少女がひとりでキャンプしているとは思えなかった。

「パパがアウトドア好きだけど、今日は私ひとりで訓練をしてるんだよ。パパとはいっぱいキャンプ行ったから、すっかり私も慣れちゃった。ひとりでやるってワガママを聞いてもらったの」

ランは相変わらずの早口で、こともなげに言うと、夜空を見上げた。

「あ、流れ星！」

ランが空の真ん中くらいを指差したのでケイもつられて見上げたが、そのときには流れ星はなくなっていて、はるか彼方から送られた星座の光だけがあった。

「見逃しちゃった。僕も見なかったな、流れ星」

ケイはランへの疑問も忘れ、冷たくなってきた両手を焚火にかざした。暖色系の写真のように、炎はふたりをオレンジ色に染めていた。

「パパだけじゃなくて、キャンプに来てた人たちがみんないなかった。朝起きたら」

ケイは足下に目を落とし、焚火で残った炭を棒でつついていた。澄んだ青空がきれいだったが、ケイの心は晴れなかった。

「夜眠るときにはいたんだよね？」

ランは心配そうな眼差しをケイに送る。ケイは黙ったまま肯いた。

「不思議。むかし絵本で見た神隠しみたい」

空を見上げたランは、太陽に向けて大きく背伸びをした。ケイは頭の上に疑問符をつけ、半口を開けていた。ランは再びケイに視線を移すと、にっこりと微笑んだ。

「考えてもわかんないことは、いったん忘れようか。そのうち何か気づくかもしれないしさ。わたしもひとりで暇してたから、川にでも行って遊ばない？」

ケイの表情に陽光が差し、ランは眩しくて目を細めた。

「あまり深くないから大丈夫」

ランは両手を上下に伸ばして50センチくらいの空間をつくった。ケイの表情が、はっきりとした笑顔になった。

ケイとランのふたりは、川に来ると足だけ水につけて気持ちよい冷たさを味わった。ケイは泳ぎたいと言ったが、流れが早いことや水の冷たさもあり、ランは彼を引き止めた。つまらなそうにしているケイに、ランはカニの手づかみを思いついたのだ。幼少のころ、特に男の子は虫が好きだ。カニは虫ではないが、多分にもれずケイもそうかと思ったランにとって、彼がはじめ怖がってカニに興味すら覚えなかったのは誤算だったが、この遊びが少ない山の中、やがてケイは興味を覚えはじめた。触ることすらできなかつたケイだったが、ランが簡単につかむのを見ているうちに自分でも触れるようになったのだ。いちど触れるようになると、さも自分で捕まえたかのような素振りを見せるところは、やはり6歳という幼さが感じられる。

川に捨てられていたタッパーに水を張り、ケイは沢ガニをそっと中においた。この子は親なのか子なのか、ケイにはわからなかつた。たぶんランにもわからないだろう。

「この子を連れて帰ったら、この子の家族はこの子がいなくなって、どう思うかな？」

ケイは心の中の疑問をつぶやきのように言葉にしていた。小さい声だったが、いちど自分の外に出してから耳を通して中に入れると、ケイはふとしたひとことに、カニと自分の境遇が類似していることを見つけた。ランにもケイの声が聞こえていたようだ。お転婆娘のランの表情には陰がさしていた。

「帰るときに川に返してあげよう」

ランはケイの肩越しにカニの入ったタッパーを見つめ、彼の肩にそっと左手を置いた。ケイは無言のまま肯いた。心なしかカニの表情が変化したようにケイには見えた。ケイはひとりさまよっているかもしれない沢ガニに笑顔を送った。

日中は太陽が輝いていたからケイも父親のことをひととき忘れて明るくいられたが、夜の闇は忘れかけていたことを否応なしに思い出させる。父親と最後に触れ合ったのが、父親がいなくなる前夜のテントの中だったことも、わずかな時間のうちにケイの中にトラウマとして闇を落としている。昨夜と同じくらい満天の星空があっても、それは夜をひっくり返してはくれない。いなくなった人たちが星々になって、ケイを見下ろしているような錯覚すら覚えた。星と星をつなぎ合わせ、父親のたくましい姿を空に描いてみた。本当に父親がいなくなってしまう気がして、ケ

イは彼だけの星座を頭から振り払った。

ランは川で捕まえた山女魚（やまめ）の口に50センチくらいの棒を差し込み、焚火を囲っている石の間に固定した。ケイが沢ガニと格闘しているときに、ランは晩ご飯のおかずを狩っていたのだ。もちろん非常食もあるが、山では何があるかわからない。自給自足のサバイバルをランは楽しんでいた。

「ランちゃん、お魚のいい匂いがしてきたね」

ケイの表情は相変わらず元気がなかったが、お腹の虫にはかなわないらしい。焚火のまわりに腰を下ろし、魚が炎ではぜるパチパチという音に耳を傾けた。

「子供なのに魚が好きって珍しいわね」

ランの言葉に、自分だって子供じゃないかとケイは睨んだが、口元をゆるめて茶色に焼けてきた魚の向きをひっくり返した。

「パパとは魚釣りもしたから、お魚は大好きだよ」

しばしの沈黙が流れた。ケイはうつむいて、焦点の合わない目で魚を見ていた。炎に焼かれて色づいてくる魚がケイの中でぼやけた。

「そろそろ焼けたかな」

ランは二匹の魚がついた棒をおもむろに持ち上げた。ケイの心境が痛いほどわかりながらも、このまましんみりしては魚が黒こげになってしまう。

「はい、この大きい方がケイの分」

ランが棒の端をもってケイに向けると、彼はありがとうといって棒の真ん中をつまんだ。山女魚は大きかったので、ずっしりとした重みがケイの腕に伝わった。

「ありがとう、ランちゃん」

「熱いから気をつけてね、ケイ」

ふたりは息を吹きかけて焼魚を冷ますと、山女魚の腹から貪りついた。清流の川の匂いが鼻腔を刺激し、つづいてきれいな土の味が口の中を覆った。ホクホクとした新鮮な魚はなんでこんなに美味しいんだろう。ケイは父親にも食べさせてあげたいと願った。父親も魚が大好物だ。山女魚と岩魚（いわな）は淡水魚でも水のきれいな溪流にしかいなくて、川釣りをする人はみんなが目標にする魚だと教えてくれたのは父親だった。でもいまは、父親のことは考えないようにしよう。油断すると涙が出そうになる。天然の山女魚に塩味は必要ない。

「ごちそうさまでした」

すっかり頭と骨だけになった山女魚にケイはお礼をして、残骸を焚火の中に放り込んだ。ランを見やると彼女は魚の頭まで食べていた。父親も頭まで食べていたので、ランが父親にシンクロして、自分だけ置いてけぼりをくったように思えた。ケイも頭を食べようと試みたことがあったが、その硬さと、魚の目が嫌で食べられずにいた。もう炎の中に捨ててしまった魚を戻すことはできないが、次の機会にはまた挑戦してみよう。明日また川に行って自分で魚を獲りたい。自分で魚を獲ったことのないケイだったが、なぜか魚を獲れそうな予感が彼の中にわいていた。ケイは、明日もまたランといることに何の疑問も感じなかった。このときばかりは不思議とケイの中には父親は登場していなかった。

朝日を背景にしてランのシルエットが優雅に揺れている。影は跳び、回り、手を羽ばたかせている。ランが羽ばたくとき、そのまま空に飛び立ってしまいそうなくらい両手で表現された羽の形と動きがなめらかだ。ケイは呆然と彼女の舞いを眺めていた。

ランの動きがとまり、翼になっていた両手は地上に下ろされた。影の中から輪郭が現れ、やがてランの表情に光が差した。

「ケイ、おはよう」

ランの微笑が寝起きのケイの目を覚まさせた。

「おはよう、ランちゃん」

ケイは右腕でまぶたをこすった。

「何してたの？」

「ダンス」

ランは先ほどと同じように右手を羽ばたかせた。あいかわらずのなめらかな動きに、ケイはまどろみそうになる。まるで催眠術師が揺らす振り子のようだ。

「上手だね、本物の鳥みたいだよ」

ケイも両手を羽ばたかせたが、飛べそうになかった。壊れかけのオモチャのようにぎこちない動きがランの笑いを誘う。それは苦笑いのようだったが、カァカァとカラスの真似をしているケイを見て、ランは満面の笑みに変わった。ケイに出会ってはじめてケイの明るさに触れられたのが、ランには嬉しかった。

「それじゃ、飛べないよ、カラスさん」

「カ、カァ・・・」

夕焼け空を背に山に帰るときよりも100倍は切なそうな鳴き声を出し、ケイは地面に倒れこんだ。あははは、とランは羽ばたいてケイのまわりを闊歩する。ケイも仰向けになり、あははは、と空を舞うランを見上げた。本当に空を飛んでいるようだった。

「今日も川に行こうよ」

朝ごはんは山菜の煮物を食べたあと、ケイはランに提案した。真剣な眼差しをしていた。

「今日も冷たいと思うから泳げないよ？」

ランはごはんの皿をそっと置いた。

「魚を獲りたいんだ」

なおも強い目をケイは送ってくる。先ほどまでカラスの真似をしておちゃらけていたケイとはまるで別人のようだ。思いがけない意志の強さが伝わってきた。

「山女魚を獲るのは簡単じゃないよ？」

「獲れるよ」

根拠のない自信があることは、幼いころには大切なことだ。挑戦して、できるかできないかの結果を知って、自分の才能を認識していく。でも、失敗しても才能を見切る時期ではない。変な苦手意識ができてケイのためにはならない。

「飛べないカラスさんでも、食べるためにはがんばれるんだ」

「がんばれるよ」

「じゃあ、もし獲れなかったら、カラスの真似やってね」

「うん」

ランにとって、ケイのカラスの真似は久々に大笑いしたほどおかしかったが、カラスの話を出しても真剣なケイの顔に笑いたくても笑えなかった。強すぎるコントラストが空気を染めていく。ランは雲ひとつない空を見上げた。空色がさらに澄んで透明になり、宇宙まで見えそうな空だった。

魚にとっては嵐がきたように騒々しい。ケイが竜巻のような存在に映っているだろう。

「そんなバシャバシャやったら魚逃げちゃうよ！」

ランは川辺の大きな石に腰かけてケイの後ろ姿に叫ぶ。ケイの反応はない。聞こえていないのだ。

ケイが狙ってる魚が何かは聞いていないが、おそらく山女魚だろう。山女魚に限らず、魚を手づかみで獲るのは難しい。魚はただでさえ違和感に敏感なうえに、野生の俊敏さに人間がついていけない。ケイのように騒ぎ立てるように川の中を歩いては、そもそも魚は静かで安全な場所に逃げてしまう。ケイは無人の住処に両手を差し込んで、かわいそうな魚を捕まえようとするが、いうまでもなく空振りで終わる。両手を川から引き抜き水面に垂らしているケイの姿に、何も得られない不甲斐なさからくる喪失感が漂っていた。ケイは長い間、茫然と立ち尽くしていた。ランがケイの肩に手を置くまで。

「獲れなかったや」

ケイの小さな身体は震えていた。ランの手に振動が伝わってきた。

「だから、難しいって言ったじゃないか」

川のせせらぎがだんだんと小さくなっていき、ケイの泣き声が少しずつ聞こえてくる。もちろんカラスではなく、それは人間の声だ。ケイにとって魚が獲れなかったのは、悔しいとかではなく、もっと別の意味があったのだろう。ランがケイを抱きしめると、彼の頬にひとすじの涙が流れた。ランの腕にも涙が落ちてきて、それは温かく、そのまま水滴のように彼女の腕から流れ落ちた。川に混じったのか、空中で霧散したのかわからないが、ケイの苦しみが少しだけでもいいから大自然と共有されるといいな、とランは思った。

「魚を獲ったらパパに会えると思った。パパ、魚が大好きだから」

夕陽に照らされたケイのオレンジ色の横顔は、彼の感情のなにひとつ物語っていない。

「そうか」

ふたりの静寂に追い打ちをかけるように、オレンジ色の世界に濃紺が増していく。明かりと暖を求めて、ランは焚火の準備をはじめた。焚火が魚を彷彿させないように、願っていた。

カレーの香ばしい匂いが、もしかするとケイを元気にするかもしれない。そんなランの淡い望み

をカレーは叶えてくれなかった。グツグツと煮えたつ音が、まるで世界にその音しか存在しないかのように場に重く沈んでいた。

「今晚はカレー！ 山で食べるカレーはおいしいよ！」

空回りになったとしても、ランは重い空気を一掃しようと鍋を菜箸で鳴らした。甲高い間の抜けた音に、ずっと俯いたままのケイもさすがに顔を上げた。表情の暗さは変わらなくても、少しだけ目と口を開いたように見えた。少しはにかんだランと目が合うと、ケイは戸惑いを見せたが、またすぐに地面に視線を落とした。

「ケイ！ カレーだよ！」

ランの叫びは虚しく響き、そして音は消えていった。

「ケイ。カレー食べようよ・・・」

ケイの後ろ姿は小さいボールのように丸く、暗くなってきた夜空に侵されて、さらに寂しさを助長した。悲しくなるのはこっちじゃないか。ランはケイの背中を蹴りたくなった。

「パパ・・・」

あたりの静けさで、ケイのつぶやき声までも大きく聞こえ、ランの胸は締めつけられる。

「パパ、どこに行っちゃったの？」

ケイの肩が小刻みに震えていた。ランは菜箸を足下の皿に置いた。そしてケイの後ろに近づき、彼の身体を身体で覆った。

「ケイ、後ろを振り向いちゃダメだよ」

時が流れる。耳をすませば砂時計のサラサラという音が聞こえてきそうな程の静寂が流れる。焚火の灯りで、ランがオレンジ色に発光していた。ランはケイの体温を身体に感じた。彼のポカポカとした優しさが伝わってきた。ケイはよい子だ。

「ママの匂いがする」

ケイは目を閉じた。ランの温もりは、母親の温もりだった。母親の幼い記憶。ケイはその優しさの中で、いつのまにか眠りについた。

匂いと温もりとやわらかさ。ケイの母親の記憶はこれだけだった。よい記憶として。顔や髪型は覚えていない。ただ、母親の背中だけは鮮明に覚えていた。たぶん悪い記憶として。幼心に、ママが遠くに行ってしまうんだな、と言語にはできずに感覚的に理解した。母親の背中は何も語ってはくれなかった。振り返った母親には逆光が差し、黒い仮面をつけた女性の記憶としてケイに残った。

ケイは光に包まれていた。優しくケイを抱擁する光はとても暖かく、多幸感がいっぱい自分が誰だかわからなくなりそうだ。光の奥で陽炎のように揺らめきながら、白い仮面が見える。きっとママが帰ってきたんだ。

「ママ、おかえりなさい」

白い仮面の女性の手がケイの頭をなでる。ケイの柔らかな茶色い前髪がなびいた。

「ただいま、ケイちゃん」

白い仮面の女性はケイをなで続けた。ケイは母親の顔を見たかったが、光の強さと心地よい眠気でぼんやりして、直視できない。まぶたを下ろしたときに微かに聞こえてきた女性の声が脳裏に残った。

「ケイちゃん、ママを許してね」

許すとか許さないじゃないよ。ケイはそう思ったが、朦朧とする意識の中、口には出せずにふたたび眠りについた。

真白の光の世界から突然現れた真暗な闇の世界のギャップがケイに深い混乱を与えた。見上げても白い仮面をかぶった母親はそこにはいなかった。ケイはテントの中で寝ていた。黄色いテント。父親のものではなく、ランのだ。ランがかけてくれたのだろう、寝袋が毛布がわりになっていたので身体は暖かかった。

「ランちゃん？」

ケイは暗闇の中で声をかけたが返事はなかった。闇に慣れてきた目でテントの中を探したがランの姿はない。テントの網の窓を開けて外を見ると、一羽の蝶が青白い光を出しながら羽ばたいていた。

「わー、きれいだなー」

ケイは思わず感嘆の声をあげた。蝶が一瞬だけ振り向いたように見えたが、きっとそれは勘違いだ。森の方に飛んでいく蝶を、追うこともできずにケイは見つめていた。山には不思議な虫がいるんだな。ケイは心を打たれていた。ランにも教えてあげよう。

ケイが起きたとき、ランはいなかった。父親がそうだったようにランも消えてしまうのではないか。不安に心臓がバクバクと警鐘を鳴らす。昨夜もランはテントにいなかったし、テントに戻ってきたかどうか眠っていたケイにはわからない。ケイはテントを飛び出した。

ケイの不安は杞憂だった。ランはいつものように朝食のしたくをしていた。カタカタと、包丁の

心地よい音が聞こえる。山生活だから決して食材は豊富ではないが、きのこや山菜に詳しいランが、できる限りの栄養バランスを考えてごはんをつくってくれる。だいたいは似たような料理になるが。

「あら、ケイちゃん、おはよう。よく寝れた？」

包丁を止めたランの目が少しだけ大きくなった。ケイはテントから出て、登山靴の靴紐を結んだ。あまり上手に結べなかった。

「おはよう、ランちゃん。昨日はなんか、ごめんなさい」

ランはケイを見つめていた。恥ずかしさにケイが目を背けるまで。

「そんなに慌てて食べちゃダメだよ、ケイちゃん」

ランがそう言うと、ご飯粒を口のまわりにくっつけたケイが目を丸くして顔を上げた。そう、これが子供のあどけない幼さ。張りつめた気持ちがときおりケイから子供らしさを奪っていたが、いまランの目の前にいるケイは無邪気に笑い、ごはんを口にかきこんだ。

「ランちゃん、この山で青い蝶って見たことある？ キラキラ青く光ってるの。僕見たんだよ」食事の後、ケイはビニールシートに寝そべりながら唐突にランに訊ねた。ランは上半身を起こし、ふたりを照らす太陽がいる空を見上げた。

「もちろん。青い蝶はこの山の神秘なんだよ。最近はずっかり減っちゃったけどね」

振り向いたランは、涼しげな大人のような目をしていてケイは驚いた。違和感はない。ただ、昨日までのランとは違う気がした。

「青い蝶は、山で迷った人を助けてくれるんだって、昔おじいちゃんに教えてもらったの。下山できる道までの案内役」

素敵な話だとケイは思った。パパに読んでもらった童話のようだ。

「僕もあの蝶についてったら、パパに会えたのかなー。ランちゃん、どう思う？」

「そうだね。パパのいるところに案内してくれるかもしれないね」

ランはなにかを懐かしむよう微笑んだ。

「だったらいいなー」

ケイは背伸びをして、ビニールシートから起き上がった。後ろ足で座れるようになっているぬいぐるみのような形になっていた。ケイはまだ幼くて身体も小さいんだな、とあらためて思う。

「ランちゃんはいつ家に帰るの？」

ケイの言葉は自分が家に帰れるという前提で成り立っている。ほんの言い伝えに、ここまでの期待を持てる純真さが羨ましかった。青い蝶の舞いは、ピーターパンのティンカーベルの金粉のようにケイに力を与えたのだ。

「うーん、もう少しここにいてから、かな？ パパが見つかったら、ケイちゃんとはお別れだね。楽しかった？」

「楽しかったけど・・・、お別れは寂しいよ」

ケイの眉毛が八の字を書いた。ランはため息をつき、ケイの顔に指をあて、眉毛を元の位置に戻

してあげた。尖らせた口と喜んでいるような不自然な目がアンバランスだ。

「あははは！ ケイちゃんの顔、おっかしい！」

ランはケイに背を向けると、テントの横をすり抜けて森の方に歩いていった。笑わないでよ、と叫ぼうとしたケイだったが、ランの背中はその言葉を望んではない。追いかけてはいけない壁があるかのようにだった。ケイは出しかけた足を止め、ランが森に入っていく姿を静かに眺めていた。

水しぶきをあげたのはケイではなかった。たしかにケイの両手が作り出したしぶきも含まれているが、もっと大きな力でしぶきを生み出したのはケイの手で捕らえられた山女魚だ。山女魚が弾く透明な水滴を顔いっぱい浴びながら、ケイは山女魚を高々と掲げた。

「やったぞー！ ランちゃん、やったぞー！」

「ケイ！ やった！」

ランは頬杖をついていた手をあげ、ガッツポーズをケイに送った。ケイ、おめでとう。ランは水しぶきが架けた小さな虹の中にケイの満面の笑みを見た。マンガのようなにっこりとした目、++++のように並んで光る歯。達成の快感が空気を伝ってビリビリと伝わってきた。

「あ！」

ピシャ。

「あ」

空中で足掻いた山女魚は難なくケイの両手からすり抜け、安住の地に戻っていった。マンガのような表情を急に変えることができないケイ。「？」を頭上に描き足したら、きっとシュールな絵になるだろう。ケイが背中から倒れた。ジャボン！ ひときわ大きな音が鳴った。

「ケイ！」

ランは慌てて川に入りケイのところに駆けつけようとするが、水の抵抗で思うように進まない。もどかしかった。

「あはははは！」

ケイは仰向けに浮かんだまま大笑いした。ほとんど叫び声に近いその声で、ランの眉間にしわが寄る。そして嘆息。世話の焼ける子だ。かわいい子だ。ランも水面に仰向けになった。一瞬でTシャツがずぶ濡れになった。

「ケイちゃんは夕飯抜きねー！」

真上に太陽があり、ランは目を細めた。水の優しさが背中を伝わり、自然と一体になる。ランも優しい気持ちになった。

ケイとランのふたりが歩いた道は、水浸しになってふたりの足跡をうっすらと残していた。たとえ太陽が乾かそうとも、ふたりの軌跡は地面の記憶として残る。傾きかけた陽がふたりの影を長くする。ケイよりも影の長いラン。ランよりも影の短いケイ。手をつないだふたりのシルエットは、まるで夕飯の買い物帰りの母と子のようだ。

「ランちゃん。お魚ごちそうできなくて、ごめんね」

ケイの優しさが心を温めてくれる。ランは思わず上を向いた。ケイに涙は見せられない。

「わたしは、いつでも獲れるから」

子供のような強がりに、ランは泣き笑いになった。このまま涙が収まってくれればいいのに。

「そうか、そうだよね。」

ケイはえへへと笑い、つないだ手の振幅を大きくした。

テントの近くにさしかかったとき、木々の間から青い蝶がひらひらと飛んでくるのが見えた。ケイは目を丸くした。

「ランちゃん！ 蝶々いた！」

ケイは蝶めがけて駆け出した。蝶はケイを待ち構えるようにその場に浮遊していた。一定のリズムで心地よさそうに上下している。ランは遠く離れていくケイを眺めていた。ケイを追いかけようとしたが、その一步が出ない。前方から抑えられているのか、後方から引っ張られているのか、不思議な力がランをその場に引き止めていた。力は身体だけでなく、心まで抑えつければじめる。ランは胸に手を当てた。

「ランちゃん！ 蝶々いるよ！」

幼いケイの単純なひとことで、ランを抑えつけていた力は氷解した。たかが子供にいったいどんな力があるというのだろうか。そんな疑問もガラスが割れるように粉々になり、ランは走り出した。青く光るケイのそばに行きたかった。

青い蝶は森の中に金色の粉をまき散らしながらケイとランを先導した。金粉は土に落ちたあともしばらくは輝いていて幻想的な風景になる。ケイは立ち止まり光る土を触ったりしたが、自分の指につけると跡形もなく消えてしまう粉に首を捻った。

蝶は迷いなく森の木々を縫って進んでいく。何がどこにあるのか、最初からわかっているように見えた。すでにケイには森は怖い存在ではなくなっていた。この先に父親がいることを何も疑っていなかった。蝶の先導には、はっきりとその目的が表されているように思えた。

「ランちゃん、パパがいそうな気がする」

ケイはランに振り返ると、大げさに両手を上げた。目の輝きは希望に満ちた色をしている。蝶の金粉がケイの背景に降り注ぎ、希望の色はさらに助長された。ランは黙ったまま頷いた。ケイはにっこりすると、再びランに背を向けて蝶の後ろをびったりとマークした。木々を抜けるようにジグザグに、けれど最短距離でケイたちは森を進んだ。

見たことのある景色が、突如ケイの目の前に現れた。すぐにそこがベースキャンプの場所だとケイは気づいた。いくつものテントが群がっていて、他とは少し離れたところにケイと父親のテントも見えた。ケイは蝶に案内された場所がはじめにいたベースキャンプだったことに驚いたが、それ以上に愕然としたのはキャンプ客たちが何事もなくアウトドアを営んでいたことだった。確かに父親がいなくなった日、キャンプ場には誰ひとり姿が見えなかった。だからケイはひとりぼっちでさまよい、ランに出会い、青い蝶を見つけたのだ。ランも蝶も、いま目の前にいるのだからケイが夢を見ていたわけではない。ケイは後ろを振り向いた。そこにランはいた。当たり前のことなのに、ケイにはランの存在がたまらなく嬉しくて目が潤んだ。

「ランちゃん、僕、夢を見ていたわけじゃないよね？」

ランは微笑んで頷いた。ケイを見やると、彼の目が大きく見開かれている。驚きに息も止まっている。

「ケイ！」

ランは声の聞こえた方向に視線を動かした。男性がこちらに向かって走ってくる。コマ送りのようにどんどん大きくなっていった。

「パパ・・・」

ケイの目から涙が流れた。震えて微動だにできないでいる。父親がケイの眼前に飛び込んできた。

「パパー」

肩で息を吸いながら、父親はケイの頭を撫でた。父親の目にも光るものが見えた。

「どこ行ってたんだ、心配し・・・」

嗚咽で途中から声が出なくなった父親は、ケイの両肩に両手をあててうつむいた。父親も震えていた。

「パパがいなくなったんじゃないか。どこに行ってたんだよ」

話が食い違っている。お互いに相手がいなくなったと思っている。ただ、ふたりにとってそれはどうでも良いことかもしれない。

「ランちゃんが助けてくれたんだよ」

ケイはそういうと後ろを振り返った。父親にランを紹介したかった。

「あれ？」

ケイの後ろにいたはずのランがいない。まわりにも目を向けたがランの姿はなかった。

「ランちゃん！」

ケイの叫び声が山あいのベースキャンプの地にこだましたが、やがて声はむなしく消え去った。孤独が胸を締めつけてくる。隣に父親がいても、ランがいない孤独感がケイの体に重くのしかかった。ランちゃん、どこ？ ケイは声にならない声を自分の中で聞いていた。

「不思議な毎日だったなー。パパもこんな経験したことある？」

「だいぶ昔になるけど、似たような経験をしたことがある」

「神隠しってやつ？」

「どうだろうね。でも子供にしかできないことだと思うよ」

「どうして？」

「大人になると不思議な世界への扉を見つけられないんじゃないかな。子供は扉を見つけて入って来れるときがあるんだと思う」

「みんな扉が見えるといいのに。そうすれば行ったり来たりできて、みんなが楽しくなるのにな」

「そうだね」

小さな仄かな光が森の中を進んでいった。木々を青く照らしながら、二匹の蝶がひらひらと。後ろを舞っていた蝶から声が聞こえる。

「ねえパパ。わたしもその扉を探せるのかな？ こっちからもあっちに行けるのかな？」

「子供の心があればね」

後ろの蝶の青い輝きが増した。金粉が線香花火のように撒かれ、二匹の蝶を明るく照らした。や

がて二匹の蝶は森の奥に消えていった。

信号が点滅している。ケイはスクランブル交差点の真ん中に座り込んでいた。まわりの人々が急ぎ足でケイの横を通り過ぎていく。他人への関心が少ないこの街では、人は結局はひとりで生きていくことになる。ここにいる人とまた巡り合うこともないし、人生で交わる可能性も限りなくゼロに近い。

軽い絶望感をもってケイが立ち上がろうとしたとき、目の前に差し出された右手が見えた。ケイの視線はその手だけを捉える。まわりの光景は陽炎になった。

「大丈夫？」

ケイが顔をあげると、ブルーのワンピースを着た女性が少し屈んで右手を出していた。

「あ、すみません。ありがとうございます」

お礼を言いつつも、手は借りずにケイは起き上がった。信号はもう赤に変わっているが、まだ交差点の真ん中にいた。左右からはおびただしいクラクションが鳴らされた。

「走って！」

突然女性がケイの手をとって駆け出した。ケイも足を絡ませながらもなんとか着いていく。先程まで無関心だった人々が好奇心の強そうな目でふたりに視線を浴びせていた。

「ホントにありがとう」

向こう側の歩道についたとき、ケイは息を切らしながら照れ笑いをした。女性もふふ、と微笑んだ。この微笑みをどこかで見たことがある、とケイが感じたときにはもう女性は微笑んでいなかったが、ケイはその表情をありありと思い描くことができた。遠い記憶が頭を内側から突つくような感覚があった。それは大きくなって頭をガンガンと打ち鳴らし、ケイの記憶の欠片をひとつの形にまとめていった。

「いきなり変なことを言っちゃうんだけど」

ケイは女性に話しかけるが視線は泳いでいた。ケイにしか見えない何かを目で追っている。

「俺が小さいころ、キャンプ場で不思議な少女に会ったことがあるんだよね。その子が、お姉さんのようなキレイな目をしていました」

女性の黒目が一瞬だけ光り、すぐに元の色を取り戻した。

「そうだ。ランちゃんだ。俺、すっかり忘れてた」

ケイを見つめる女性の視線が強くなった。ケイに体を貫かれたような衝撃が走った。この感覚を俺は経験したことがある。

「ねえ、この街を案内してもらえないかな？」

「え？」

「はじめて来たの。迷子なのよ」

「お姉さん、どこの出身なんですか？」

「ちょっと遠いところ」

「そんな気がしました」

手がざらついている。女性に握られた手のひらがきらめいている。ケイが前を歩き、女性が後ろ

を歩いた。ビルの合間に敷かれたアスファルトの道は、まるで川へと続く山道のようにだった。

aoi - 扉

<http://p.booklog.jp/book/61808>

著者：橋本コウ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/koohashimoto/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/61808>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/61808>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ